

フィンランドの作家たち（その2） Finnish Writers in Youkobo 2017

Finnish Writers in Tokyo in cooperation with the Union of Finnish Writers, Helsinki and
Youkobo Art Space, Tokyo

目次

・まえがき 村田弘子

・エッセイ

「私の分身」

サク・ヘイナネン

「内と外であること」

マリア・マティンミッコ

「杉並ノートブック」

カタリナ・グリッペンベルク



遊工房におけるアーティストや研究者の受入は1989年より始まり、海外からの作家の創作・研究活動の場として定着した。国際機関からの推薦枠の受入れも実施している。本プログラムは、フィンランド作家協会（UFW, The Union of Finnish Writers, Suomen Kirjailijaliitto）と2016年より始めたもので、フィンランド作家受入の第2陣である。第1陣は、昨年（9月～11月）3ヵ月間滞在活動した。今回は、春（3月～5月）3ヵ月間となる。3人の作家が、各1ヵ月ずつ交代で遊工房に滞在し、東京を始め地方へも足を運び、それぞれの創作活動に寄与し、異文化での生活から多くの刺激を得て、その後の活動の肥しとしたと確信している。ここに頂いた、エッセイは、3人の滞在后、寄稿頂いたものである。同時期に滞在した美術家の創作活動との干渉、国内の関係者との交流など、多くの足跡はとて貴重であり、今後とも継続していきたいと考えている。

2017年・FWU招聘・滞在作家

2017年3月1日～31日 サク・ヘイナネン

2017年4月1日～29日 マリア・マティンミッコ

2017年5月1日～31日 カタリナ・グリッペンベルク



サク・ヘイナネン

作家/イラストレーターである。彼は以前、アールト大学でプロのタイポグラフィックデザイナー兼グラフィックデザインの教授として活動した。彼は自身が執筆と挿絵を施した2つの児童文学「Zaida and the Snow Angel -ザイダと雪の天使」（2014年 Finlandia Junior賞候補）「Zaida and the Thunderbolts - ザイダと雷」（2015年 Arvid Lydecken賞候補）で賞賛を受けた。



マリア・マティンミッコ

1983年 オウル（フィンランド）生まれ。ヘルシンキに拠点を置く作家である。作品は、詩と散文の中間のジャンルにある。近年、Valkoinen (=白 | 2012年)、Musta (=黒 | 2013年)、Värit (色 | 2017年2月)からなる3部作を完成させた。Valkoinenはフィンランドの放送局によって与えられる詩のベストコレクション賞を獲得。このコンペティションでは、初めてデビュー作が認められた。また、Mustaも賞賛を受けた。彼女はフィンランドの様々な学校で執筆を学び、美学を主題とした哲学を極めていく。



カタリナ・グリッペンベルク

1977年 ヤコブスタード（フィンランド）生まれ。彼女は、フィンランドでは、スウェーデン語を話す少数派であり、スウェーデン語で執筆する作家である。今まで4つの詩集を発表し、演劇の脚本も手がけた。ポリフォニックまたはマルチボイスのテキスト、規範や社会的規定を調べることは、彼女の執筆の焦点である。ヘルシンキ大学文学部の修士課程を卒業。グリッペンベルク氏の詩作は、スウェーデンの国営ラジオによる賞他を受賞をしている。詩やエッセイ、そして領域横断した著書を専門とする小さな出版社「Ellips」でも編集者として活動。現在は、コペンハーゲン（デンマーク）を拠点としている。

私の分身

サク・ヘイナネン

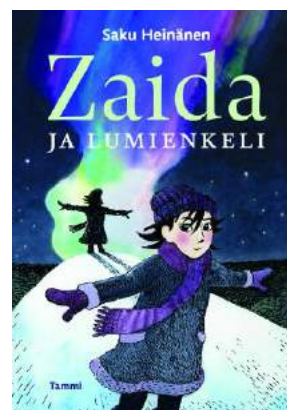
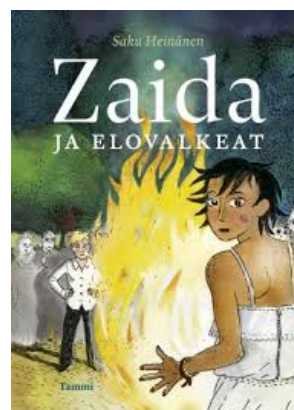
作家として、私は常に分身（ドイツ語で言い換えるとドッペルゲンガー）という文学的テーマに興味している。それは多くの小説に存在するが、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテやギ・ド・モーパッサンなど著者自身が分身と出会った記述もある。通常、物語は暗く、不吉である。自身の分身をみるということは病気が差し迫った死を意味する。

フリオ・コルタサル素晴らしい短編小説「Lejana（遠い女）」のアリーナ・レイエスの日記では、ある若いアルゼンチンの女性ピアニストが、満ち足りた社会生活に退屈し、冬のハンガリーで彼女の分身を考え出した。彼女はあまり好きではない、むしろ軽蔑するような男性と結婚する。しかし誰が彼女をブダペストに連れていけるか。そこで、彼女は想像の中でたびたび橋を歩いて渡る。橋の中央で、彼女は貧しいやつれた女性と出会った。その女性は強引に彼女を抱きしめ、2人は入れ替わってしまう。ハンガリアンの物乞いが、お洒落な暖かい服を来て、その姿はまるで彼女自身。その女性は彼女の元から急いで立ち去り、彼女は壊れた靴と擦り切れた服を纏い震えながら取り残され、恐怖に慄いた。

私の長年のお気に入り、フョードル・ドストエフスキーは、「The Double(分身)」というタイトルの短編物語を書いた。この短編は彼の著作「Crime and Punishment(罪と罰)」「The Idiot(白痴)」「The Brothers Karamazov(カラマーゾフの兄弟)」よりも前に書かれている。そして、彼は数冊からなる小説で熟達し、ドストエフスキーの焦点が社会学から心理学への転機を記録した。「分身」の中の主人公、名義上の議員 Yakov Petrovich Glyadkin(ゴリャートキン)は、あるパーティから気恥ずかしいほどに投げ出された後にSanktピーターズバーグのFontanka川によって、雪の多い11月の夜に自身の分身に遭遇する。その後、ドッペルゲンガーがGlyadkinの命を最後に奪うまで、彼らは、しばしば会い始める。そして、彼自身は精神病院に連れて行かれてしまう。

著者自身に関連するものも酷い傾向がある。例えば、ある人物が彼の研究に入ったとき、モーパッサンはホラーストーリー「The Horla」に取り組んでいた。その人は、モーパッサン自身の正確なレプリカで、彼の言葉を口述していた。その後、作家は病気になる、狂気に落ち、死に至る。ハッピーエンドのドッペルゲンガーの物語はなかっただろうか？

若い読者のための三作の小説を完成させた後、大人のための最初の小説に取り組んでいた。同じ頃の2016年11月に、東京でのAIRプログラムの機会を与えられたことを知らせるメールを受けた。まだ大学で非常勤講師を務めていたが、契約は年末で終了することになっていた。



私はすでに、2017年の始まりを楽しみにしていた。なぜなら、その年のために、フィンランド文化財団からの12ヶ月間の制作助成金を授与されていたからだ。つまり、本の販売自体はとてま控え目なので、教職

からの究極の自由と作家としての恩恵だ。いつも日本への旅行を夢見ていたが、遠く離れているように見えた。私は決してそのような動機は、持っていなかった。

私は非常に喜んでいて、やっとその興味深い、ほとんど神話的な国で書くことに集中する機会を得たのだ！ 同時に緊張も始めた：「そこでどこへ行って、何を見て、食べるべきか」を事前に知っておく必要があった。「The Shortest and Longest Day（最も短く最も長い日）」という仮のタイトルで、その小説の最初のドラフトは順調に進んでいたが、3月のフル1ヵ月は充分ゆとりがあると予想していた。日本を旅行した友人、東京で働いていた同僚、そして日本に居たことのある私の教え子たち（日本は美術やデザインの学生にとって人気のある行先であり、行く学生は多い。）と連絡を取った。見事な予定リストを書いた — 東京の内外のエリアと関心場所や 街と公園、書店、美術館、飲み場、カフェ、レストラン等。



遊工房に2017年3月1日に到着した。そこでの歓迎は心のこもったもので、ホストの村田さん夫妻、親切なスタッフの真木子さんと一緒に、すぐに自分の家にいるように感じた。私は、3番のアパートを見せられた。広々としていて整備され、穏やかな緑豊かな庭に向けて南向きの大きなバルコニーがあった。また、オーストラリアのNicolaとシンガポールのXiang Yunという仲間の芸術家とも会い、すぐに良い友達になった。



私の編集者は、クリスマス休暇中、「The Shortest and Longest Day」の最初の原稿を読んでいた。私たちは1月に会い、非常に厳しいフィードバックを受けた。私は遊工房AIRで、独りになるまで原稿に触れないことにしたが、その代わりに100ページ分のメモ、提案、改善アイデアを書いていた。

その故、遊工房での私の仕事は、第2版を書くことだった。冬至の伝統的なスカンジナビアのお祝いである Lucia Dayと、夏至の真夏の日の2日間に分かれた1日の小説である。ストーリーの日々は20年別々で、並列した話は、フィンランドの2カ所の場所に依った。

私の滞在序盤の後、必要だというだけでなく、本当に自分自身を執筆に没頭させたいと気付いた。まだ否定的なフィードバックの打撃から回復途中だったが、編集者のコメントに同意した。テキストは不完全であり、多くの注意を必要としていた。特にもっと、主人公の肌の中に入っていなければならなかった。その人になろうと努力しなければ行けなかったし、限られた時間で、その2日間を彼女のように生きなければならなかった。想像力を総動員して、脳を広げて、情緒を最大限に感知しなければならなかった。このすべてには、本当に傾注し集中することが必要だった。

しかし、東京と日本も見たいと思っていた！私は両方が必要だと決めた。そして、その後続く数週間、自分を2つに分けた。

3番のアパートの中に閉じ込められた隠者がいた。日の出に起きて、コーヒーポットを机に持って行く。慌ただしく豆腐を揚げ、食事のために米を炊く。安価な地元のウイスキーを飲み、真夜中まで働き、灯りを消して就寝する、という毎日を繰り返した。

そして友人が推薦した博物館、書店、寺院を訪れた外交的な学習者と日本探検家でもいた。彼は、地元の食べ物を味わい食べ、遊工房のスタッフや他のアーティスト達に続いて、オープニング、アートフェアなどのイベントにも出席した。



隠者は、小説の第2版を書いて、滞在の終わりの2日前のに完成した。彼はそこで、もう一度読み返し、良くなるように微調整を加え、編集者に送った。コーヒーは数パック、ウイスキーボトルは2本、ビール缶とポテトチップスの袋は数えきれないくらいかかった。日本らしいものは一切なかった。

活発な訪問者は沢山のひとと会った。偶然のことに、出版社の知り合い西村さんが近くに住んでいて、彼女の家に招待してくれ、一家や彼女の海外の友達と会った。西村さんの仲間のアーティストは彼を同僚に紹介した。翻訳家や芸術家、美術学生などが、遊工房のオープニングに来た。彼は少し日本語を学び、ランチと夕べを一緒にし、地元の料理を様々な形で楽しんだ。やっと本当の観光客になって東京の外に出て、新幹線に乗って京都へ…いや、彼は本当に行ったか？

とにかく、彼らは両方とも幸せだった。しかし、物事は終わらなければならなかった。月が過ぎた後、彼らは成田空港に立っていた。パスポートとセキュリティチェックでは別々に行くことができなかったので、隠居者と観光客の双子は私の古い自己に合併する必要があった。相反する感情で、私は長い日本の飛行機の席に座り、涙を流し、すでに逃してしまった日本に別れの手を振った。



内と外であること

マリア・マティンミッコ

私は遊工房で2017年4月を過ごした。フィンランドの作家活動支援機関・フィンランド作家協会（Union of Finnish Writers）を通じてAIRプログラムに応募した。幸いにも選ばれ、遊工房と協会によって手配は完璧だった。

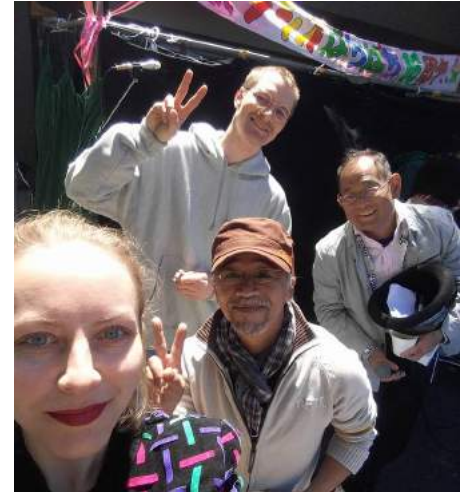
東京の最初のキスは、雨降り肌寒かったが、天候はすぐに暖かくなり。4月は、世界的にも知られている桜の季節なので、冷たいサプライズは間もなく忘れ去られ、ピンク色に色づけられた。到着後、レジデンスまでの道程を心配していたが、空港はすべてが分かり易く、東京は表示が明確であると分かった。遊工房スタッフの歓迎は、親切で明るかった。他の4月滞在のアーティストは、ノルウェーのビジュアルアーティスト、エスペン・イデンだった。彼と会って、活動を知り、一緒に時間を過ごせたのは楽しいことだった。



私は、心に留めていた2つのプロジェクトに取り組んだ。まず、4番目の本、「Kolikka（角）」に取り組む。その本には、主人公が実在しない土地に上陸するところから始まる。それは、創造的な土地へと距離を取ることによって、善と悪そして純粋と不純について、文化的に関連したアイデアと他のものとの間で探求している。著作は、身体が存在について大きな理解を握っている。人に起こること、人体に起こるものすべて、そして身体は常に物理的環境に既存しているということ。本は、（世界の）見識、報復、愛情を混ぜることによって読者に疑問を投げかける。独自の方法で、この本は私たちのグローバルタイムへの旅となる。

2つ目のプロジェクトは、フィンランドの作家であり研究者のMarkku Eskelinenとの協同である。彼らは、そのプロジェクトを「a time-fiction」と呼ぶ。それはフィンランドの作家グループによって書かれる、実質上のポスト・ウリポ（post-Oulipo）の詩集に算入される予定。詩集は2018年春に出版される。

自分の滞在中の日程を計画するのは容易だった。週に数日、街に出、後の数日は、遊工房での仕事に費やした。作家とは非常に自立的な仕事なので、自分自身で物事をするのに慣れている。街での人々の数には、私は非常に驚かされた。何度も、街に繰り出すだけで非常に疲れた。フィンランド全土では人口600万人、東京だけで、1300万人以上居る。自分の身体と精神がこのような大量の人に対処することに慣れてないと思っていたが、実際には、まったく問題なく、予想と違って興味深かった。遊工房では、良く眠って休んだ。繁華街から遠い滞在場所からの旅には努力を必要としたが、一方で、善福寺まで街の混雑が届かなかった。東京では、寿司をたくさん食べ、不思議な未知の食事や何度かの素晴らしい食事をし、少しお酒を飲み、親切や日差し、温泉そして実験的なファッションを楽しみ、渋谷交差点に魅了され、川端の本を読み、他の日本の美学や文化についての本や、メトロで携帯でリュス・イリガライを読み、公案の本を買い、プライベートカラオケルームを祝って体験し、地元の人に会い、桜を愛好し、書く上で新手法を見つけ執筆を進め、Finnish Institute In Japanで働く若いフィンランドの女性3人に会って嬉しかった。オリエンテーリングで自分自身の信頼を高め、素晴らしい富士山を見に行き、河口湖から写真を撮り、メモや観察をして、自分自身と西洋のバックグラウンドを新たな光で見直し、遊工房スタッフの親切さと支援に大変喜んだ。



滞在中には、多くの博物館（写真館、東京国立博物館、六本木森美術館、国立近代美術館、大田記念館、東京都美術館）、公園（神代植物公園、新宿御苑） 地域（吉祥寺、渋谷、新宿、原宿、浅草、西荻窪）そして温泉（荻窪、志村 - 坂上、河口湖の富士山周辺）などに触発された。日本には以前一度（京都、奈良、大阪、城崎温泉）を訪れたので、初めてではない。東京では、マナー、精神、構造、雰囲気も観察した。興味深く入り多かった。私の個人的な意識によって知覚と解釈が行われたと、もちろん分っている。時々私は外部の人間だと思いが繋がっていないと感じた。時には都市の脈拍の中にあり、正しい周波数にチューニングされているように感じた。どちらも貴重な経験で、作家として私は内と外でありたい。滞在期間は成功だった。

東京を離れるときに、夏がやって来た。帰るときもフライトは3回。東京の後、ヘルシンキは、ほとんど無人島のように灰色で退屈だと感じた。ヘルシンキに到着してから数日後、雪が降ってきた！なんてショック。今は、ヘルシンキに戻ってからすでに数週間経ったが、何となく未だに東京を感じる事ができる。食べ物や、東京の色が懐かしく、意外にも私は大都市の感覚を懐かしんでいる。



杉並ノートブック

カタリナ・グリッペンベルク

[離陸]

シンボルの群れ、音節、近づいてくる、私の周りに立ち上がり始める、私が登っている足場、読むことができない、が、垂直に登る、水平に、日本語の文字。

[機内モード]

リトアニアの脳科学者の隣で、北シベリアを越える時に起きている。脳科学者は風邪引きで熱がある。北朝鮮の空域に沿って中国を越え舵をとり領海を移動する。出発前に、私は地震警報アプリをダウンロードした、と同時に最も近い地震避難所を案内するアプリに勧められた。しかし、私は別の数表示通りのシステムでそれらを見つけることができるだろうと疑った。代わりに机、広場、スポーツ・フィールド、公園、寺院の庭を捜すことを決めた。（しかし、私の日本滞在の間、地球は微動しなかった。）

[着陸]

吸音端子を通過して下降する。手荷物ベルトでは、日本人の女性のグループが、日本人のお辞儀の仕方のイラストのように、頭と背を真っ直ぐにして深くお辞儀し、お互いに別れの挨拶をしている姿を観察する。（曲がり始めるときに、足が壁にぴったりと立っていることをイメージするのに役立つかもしれない。）"脳科学者は、外科マスクで鼻と口を優しく覆う夫によって歓迎される。バスで眠りに落ち、橋を渡って目を覚ますと、反対側に東京の高層ビルが立ち昇っている。都市の森を曲がり、吉祥寺駅から白い手袋をした高齢のタクシー運転手のレースカーテン付きのタクシー。遊工場の看板が見えて、笑顔で手をふる真木子。他のレジデンス・アーティストに会う、ダン（東京）、リチャード（ニュージーランド）、ジョンバティストゥ（フランス、以降はJ-Bで表記）、そして遊工場の弘子、達彦、真木子、ジェイミと近くのレストランで、歓迎の夕食。私たちはテーブルの低い部屋にスライドドアを開けて入る。給仕は幸福そうな甲高い声で小さなプレートを持ってドアを開く。私たちは乾杯。発酵した鶏の肝臓を味わう。就寝時間、タイムゾーンのすべての夜、今、私の睡眠に階層化する。



[3.5]

制服姿の高齢の男が、歩道に沿って、静かな歩道越しに私を手招きしている。私はスムーズに地元のスーパーマーケットの冷たい果物の山、馴染みのない魚、刺身のサク、醤油の品揃えの長い棚、さまざまなサイズの酒の箱やボトル、昼の弁当、やかましく繰り返すスピーカーのスーパーマーケット・ジャングルに到着する。

ラーメン屋でランチ。店長は、すべてのお客様に、こんにちは、さようならと感謝している。温かなフレーズが店内で繰り返されている。入り口の改札機で日本語メニューを読めないの、前の女性と同じボタンを押す。誰もがお互いに話していない。ここで滞在できると感じる。鍋の湯気のため、小さな飾り気のない店で、1人で食べにきている他の客達と、カウンターの周りに座って、ラーメン作りの行程が繰り返される動きと客の湯気を観察して。客達は、上手く麺を啜っている。私も試してみるが、何かの練習が必要のようだ。午後は、近くの神社を達彦が見せてくれる。参拝者が階段を上って歩いて、手をたたき、手を合わせる。小さな木製絵馬に書かれた願い事。

[6.5]

(脳科学者の?) 悪寒と熱が私を捕らえた。 高熱の数日間ベッドに横たわって、紙ナプキンでゴミ箱を満たして、注意深く予定されたごみのリサイクルステーションヘタ方下する。マスクを着けている通行人の中で、赤い鼻が恥ずかしくて。 スーパーマーケットの広いマスクコーナーから選んで購入したが、着用してみると自分の息で眼鏡をくもらせ、眺めが悪くなる。 東京の動き、また近隣のスピーカーで毎夕午後6時、子供たちに「ゲームを止めて家に帰る時間だよ」と告げる夕べの歌を聞いていた。 しかし私はすでに私の隣に呼び出された、ベッドに横たわっている。

[8.5]

気分が良くなると、私は近隣でゆっくり散歩をする。予期せぬ地面のために鉛筆で鋭く描かれたような堅牢にみえる家屋、造られたコンパクトな家、道に沿って詰め込まれ、狭い庭の外へ押し出された樹木や植物。ある木造住宅は、荒廃した大きな庭があり、新しいコンクリートの家々とは違う。午後、私は石神井公園まで自転車に乗った。背の高い木々、湖沿いの遊歩道の木製の栈橋、緑の中のいくつかの神社、ひとつは坂道に隠れている、独り独り、別々に、もっぱら鐘のロープを引っ張るために留まる人、歩いて、階段にひざまずく女性。



[11.5]

夜は暖、J-B、リチャードと一緒に西荻窪に行き、何人かのダンの友人たちに会う。 私たちは暖の知り合いの一人が運営するギャラリーに行く、途中でキオスクで小さな酒瓶を買う。 ギャラリーは小さい、床に敷かれた毛布の上は私たちで一杯になる。 私たちは暖のために歌う、その日は彼の誕生日だ。 私たちが膝を突き合わせて座っている環には、互いのポートレートを描いているものも居る。 私たちは、津波によって倒された福島の木造住宅や、建て直した寺院をアーティストの写真で見る。まわりの青い線が、はっきりしている。静かな道を通って真夜中に歩く、初夏の緑の葉、暖との取り交わし：私に会うたびに彼は新しい日本語の単語の一つを教えてくれる。

[12.5]

私は電車を初めて試す。一人の男がプラットホームで、私のところにきて、どこに行くのか聞き、私と一緒に2つの駅を旅する。新宿で彼は私を乗り継ぐ線に導き、より良い電車の地図を手渡す。彼は名刺をくれて、(彼は美容士だと言い) 素早く表れたと同じように素早く親切に立ち去る。国立博物館の静かな部屋の照明付きショーケースを歩いて、博物館の書店では、17世紀の忍者の訓練マニュアルである、「正忍記」の翻訳を購入する。

忍者の訓練マニュアル、私がとにかく将来文章で使っていると思う正忍記：「忍びのスキルの1つは、時には暗闇の中で足音を変化すること。[...]このタイプの不明瞭な足踏みには、10種類のバリエーションがある：1. 抜き足 - 足を引き上げる、ひそかな足音。2. すり足 - 地面に沿って足を滑らせる。3. 締め足 - 足先歩行、これは足音を抑えたり、歩行を締め付けるもの。4. 飛び足 - 一種の跳ね。5. 方足音 - 危なっかしい歩き。6. 大足 - 長歩で歩く。7. 小足 - 短歩で歩く。8. 刻み足 - チョッピング歩き。9. 走り足 - 走る。10. 常の足 - 普通の歩行。」*

「よく旅された道路は塩味があり、味があればこれを覚えておいてください」*

[13.5]

西荻窪で詩の日本語の朗読に出席する。日中は雨が降り、地下足袋は濡れたまま。私は聞いて、表情や音調を読む。これはローカルなイベントのように見え、詩人たちはお互いを知り合っているようだ。私が要点を理解できる為に、一人の詩人が英語の翻訳を読む。グループは土曜日に新しいレッスンを手配し、参加することを歓迎。

[15.5]

自転車で吉祥寺と井の頭公園に行く。木の冠は夕方の湖に映し出されている。子供のために錯覚のトリックを行うパフォーマー。近くの動物園からの聴き慣れない野次。私はネオンサインが点灯し始めて、頭の中は、歩いて戻ろうとしている。そして全ての入り口の前に暖簾が付いている小さな飲食店、居酒屋、光り輝くカラオケバーとゲームセンター。列車が頭上を走っている。私は夕方の暗闇の中を巡り写真を撮る。鉄道の下に座って、隣接するゲート付き自転車駐車場を見張る警備員との半分分かっていないような会話で長いこと費やす。しかし、どういうわけか私は彼の日本語の広範な説明を理解している（と思った）あるいは翻訳に沿ってイメージしたのか。

[17.5]

本の町神保町を訪ねてみる。隣接する書店のある通り、そのほとんどは中古品で、あるものは、高価なスクリプトロールと古い地図が付いたアンティークのもの。本の山はフロアから屋根まで、道路の外に向かって、前に沿って積み重ねられ、紙の通りに沿ってページの色調を、本の中を歩くように誘う。そして、山の後には、長い間そこに座っていたように見える本屋の守衛たちが居る。



[18.5]

国立近代美術館を訪れて、上田正二の故郷の郊外の砂丘に並べられた人々の集団、菊地計月の「歯を黒く染めた女」と浜口陽三のメゾチント夜のスイカの写真を見、続けて工芸館、しかし即座に、とても短い時間で対象に私の目を限界まで満たさなければならないように早く歩く。雨の中、宮殿の庭を歩いて長歩で砂丘歩き。銀座のハードショッピング街、走り足で通り抜け脱出する。東京駅の地下、すり歩きで、西行きの青い電車が見つかるまで、インフォメーションデスクのスタッフが駅の地図に描いた矢印に沿って歩く。帰宅途中のオフィスの人々、あるものは睡眠中もブリーフケースを握っている、降りなければならない時の時間を図っているかのようだ。

[19.5]

遊工房で私の執筆についてプレゼンテーションを行う。その後、私たちはアートセンターのギャラリー・フェアを訪れる。道路の外では、消防隊は訓練をしていて、抱え、走り、アスファルトの上に消防ホースを伸ばしている、自身のアート・インスタレーションのように。私たちは近くのレストランで夕食を取り（消防隊員も同様に）その後、西荻窪に向かう電車に乗って、J-B、リチャード、そして私は以前プロのキックボクサーで、今Googleで働く人と会ったバーで、残りの夜を過ごす。そして10年東京に住んでいるフランス系モロッコ人のカップルや他の客も。日本人の夫婦は、深く眠っているように、カウンターに屈み込んでいる。彼らは躡く前に、歩道の片側からよるめいて、帰宅する他の道へと互いに大事な相手を抱えた。



[22.5]

+ 28°C、私は涼しくなるのを待って、カーテンの後ろに座って仕事している。バルコニーぼドアを開き、網戸を閉じ、緑色の内庭、波打つ大きなバナナの葉。遅い午後、私は電車の列車に乗って行きあたりばつたりに駅で下車し、長い運河に沿って近隣の通りを歩く。代官山TSUTAYAの巨大な書店、別のセクションの3つの分館を、日本の近代詩の棚（残念ながら翻訳されていない）。白い手袋の警備員に、ラッシュアワーで人々が列車に押し込まれているのを見て。

[24.5]

昼間、仕事。夜、リチャードのフラットで夕食。ダンとリチャードのニュージーラント・ジャパニーズフード。リチャードのスタジオで、太陽光が同じ角度で落ちる一日の決まった時間に、毎日混ぜ合わせた粘土、彼は遊工房の展覧会のために、粘土の形作りをビデオ記録している。そして各クリップの終わりに再びそれを練り形成し、テーブルの上に置いて、元のように布の下で休憩させる。

[25.5]

森美術館を訪れて、大きな窓の隣の52階の美術館のカフェに座る、オフィスビル、高架道路、目を傷つけるような眺め、昼光、街が続く。夜は吉祥寺の居酒屋に戻り、騒がしい、仕事帰りの人々に囲まれ、話に埋没している。住宅街を通過して、遊工房へ、静けさ、今、ここ、惑星の向こう側、スリリングな静けさの、ここを歩いて家路へ。



[27.5]

遊工房・事務所でお別れのお茶。夜は、フランスのモロッコ知人と荻窪の温泉を訪れる。我々はプールに沈む。最初のもは熱く黒っぽい火山の水で、1つは炭酸水のボウルに浮かぶようなもの。フィンランド式サウナ（中にはテレビがついていて全くフィンランドサウナとは違うもの）、韓国式サウナ、暖かいオレンジ色の結晶質の石で覆われた床がある空の部屋。私たちは、沖縄の女性が経営する小さな店で、富士山模様の皿にキュウリのような塊茎で苦い野菜を食べる。私は真夜中前に最終バスで、遊工房に向かう。

[29.5]

仕事を終えた夕方、私は自転車の音、鉄道線の音、四角、通り、路地の音の助けを借りて私のルートを覚えていて、新しい輝く都心が現れ、暗闇の中の電車の音、自転車の光が道路を広く渡り、自分の夜景の東京を明かしているように。

「交差点に辿り着いて、どの道を取るべきかわからない場合、そこで滞る代わりに、心に最初に輝く古い詩を暗唱するべきだ。次に、詩の中のいくつかの音節を数え、それが奇妙であれば右に行くことを選び、偶数であれば左に進み、最終的に決定に疑問はない。」*

[30.5]

清掃の日。私の痕跡が消えたら、ダン、リチャード、J-Bと一緒に自転車で西荻窪に行き夕食をとる。ダンのスタジオでは、プラスチック製のプールが水で満たされ、ホース、ペイントされたキャンバスが、水の循環の中で洗い流される。その後、私たちは屋敷を通過して長い直線道路に沿って自転車を漕いだ。何人かの会社員が、彼らのブリーフケースを持って家路に向っている、暖かい夕方の人物、静かにお互いに移動し、門の後ろに消え、密集した庭園へ。

[国際空域]

ロシアはシベリアのカーテンを開く。画像は頭の中を飛び散る：列車は街の下へ上へと、ある区域の外、新しい景観へと振動している。地下鉄の駅は、北、西、東、南、北東の出口を出て他の出口へと。輝くカーペットのように遠くに広がる夜のライト。ラーメン店。投げられた女性の声。夜明けに目を覚ます鳥は、怒っている年とった男性の声のように聞こえる。サイクリングで京都の世界遺産から別の世界遺産へ、三十三間堂の1001のすすけた観音像を見ながら、上り坂を登って、愛宕念仏寺の苔生した石仏の顔に、夜は皇居庭園を通り、壁はブロックのために伸び、発電機の光が砂利の上を掃いている。東京の市民、あなたを誘導する、翻訳の有無にかかわらず。

[戻る]

すり足で、北欧の夏にまだ東京の夜を歩いている。私は6月の緑を通して夢中だ。突然夜が溢れ、そして数時間寝ることができる、アラームを10分先にして、10分の間、私は数時間寝る。その日は夜の惑星が回転するスリットがある。私は遠い夜の中、日中に歩き、深い眠りにある時間帯を運んでいる。

睡眠・Sleep、

夜・night、

惑星・planet、

自宅・home、

工房・Studio、

工房、遊び・Play、

カーテンは開く・curtains opening、

遊工房・Youkobo。

*) アントニーカミンズと南義信：忍者の真実、タトル出版、2011

